鳥取番城遺跡　発掘調査報告書

２００７．11

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

鳥取番城遺跡　発掘調査報告書

２００７．11

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

は　じ　め　に

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。

市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋の地は、800余りの古墳が存在していたように、上野毛の国の中心地として栄え、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、上野国分僧寺、上野国分尼寺、上野国府など重要な施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され、日本の発展の一翼を担いました。

鳥取番城遺跡は、赤城山南麓の鳥取町に位置します。調査の結果、縄文時代前期の遺構や土器、中世の城館跡に伴う堀跡が発見されました。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、期間の制約された中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成19年11月２日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　砂　川　次　郎

例　　言

1　本報告書は、市有地売却に伴って実施した鳥取番城（トットリバンジョウ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地　群馬県前橋市鳥取町410番１

3　調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 砂川　次郎）の指導のもとに、委託者 前橋市管財課（管理者 高木　政夫）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役 須永　眞弘）が実施した。

調査担当者　梅澤克典（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
　　権田友寿・荻野博巳（スナガ環境測設株式会社）

調　査　員　山口和宏（スナガ環境測設株式会社）

4　発掘調査期間　平成19年８月８日～平成19年９月15日

整理期間　平成19年９月16日～平成19年11月２日

5　調査面積　320㎡

6　出土遺物は、前橋市教育委員会が保管する。

7　本書は、調査団指導のもと、スナガ環境測設(株)が作成に当たり、原稿執筆…Ⅰについては梅澤克典、その他は権田が担当し、遺構・遺物のトレース…権田・佐々木智恵子、遺物整理・実測…戸根、遺物洗浄・注記・接合…金子正人・須永　豊・戸根、写真整理・内業事務…須永が担当した。

8　発掘調査に参加した方々（敬称略）

北爪一郎　品川浪江　安立孝一　信沢弘造　飯沼　聡

凡　　例

1　遺跡の略称は、鳥取番城遺跡（19Ｃ39）である。なお、本遺跡の名称であるが２つの遺跡（五反田遺跡・番城遺跡）にまたがっているため、新たに鳥取番城遺跡とした。「番城」は旧地籍の小字名である。

2　遺構名の略称は、次のとおりである。

溝跡…Ｗ　　土坑…Ｄ

実測図中の記号　Ｓ…石　Ｐ…土器

3　実測図の縮尺は、次のとおりである。

遺跡平面図…１/100　土坑…１/20　溝跡…１/40・１/100　土器…１/３・１/４　石器・石製品…１/３

4　本文中の（　）は推定値、［　］は現存値を表す。

4　挿図に国土地理院発行の２万５千分の１「前橋・大胡・渋川・鼻毛石」を使用した。

5　各遺跡の位置の基準は、国土地理院三角点と照合済。

Ｘ０・Ｙ０グリッドは日本測地系　座標値　Ｘ＝46,924.000m、Ｙ＝－64,960.000mである。

グリッド４m間隔。水準点 B.M.…161.00m。

6　土層断面の土色名及び土器類の色調名は、『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。

7　土層注記中の締は締まり、粘は粘性とし、強・中・弱・なしの４段階に区分した。

目　　次

はじめに

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1

1　遺跡の立地 …… 1

2　歴史的環境 …… 1

Ⅲ　調査の方針と経過 …… 4

1　調査方針 …… 4

2　調査経過 …… 4

Ⅳ　層　　序 …… 4

Ⅴ　検出された遺構と遺物 …… 5

1　縄文時代の遺構と遺物 …… 5

(1)　土　　坑 …… 5

2　中世以降の遺構と遺物 …… 5

(1)　溝　　跡 …… 5

(2)　土　　坑 …… 6

3　ま　と　め …… 6

(1)　縄文時代 …… 6

(2)　中世以降 …… 7

挿　　図

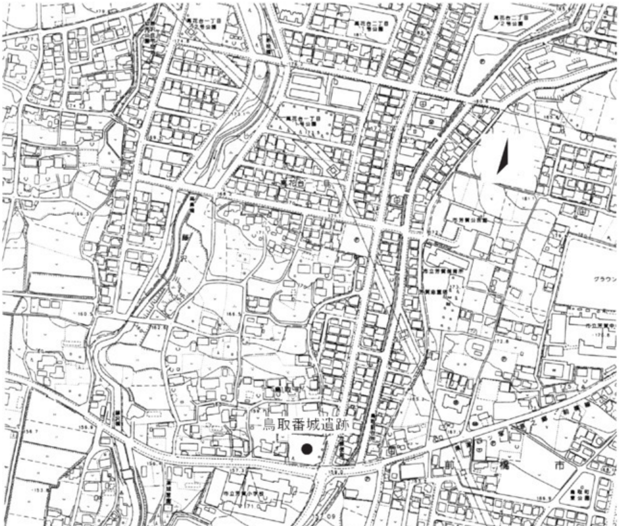
第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡図……３
第３図　基本土層断面図……４
第４図　鳥取番城遺跡全体図……９
第５図　Ｄ－１・２号土坑……11
第６図　Ｄ－３～６号土坑……12
第７図　Ｗ－１・２号溝跡……13
第８図　Ｄ－１・２・５号土坑、
　　Ｗ－１号溝出土遺物実測図……14

表

第１表　周辺遺跡概要一覧表……２
第２表　土坑（縄文時代）計測表……５
第３表　土坑計測表……６
第４表　遺物観察表（縄文時代）……８
第５表　石器観察表……８
第６表　土遺物観察表（中世以降）……８

写 真 図 版

図版１　鳥取番城遺跡全景、
　　Ｄ－１～６号土坑全景、
　　Ｄ－１・２号土坑遺物出土状況、
　　Ｗ－１・２号溝全景
図版２　Ｄ－１～３・５号土坑出土遺物
　　Ｗ－１号溝出土遺物



第１図　遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経緯

平成18年度に前橋市より鳥取町の市所有地の売却について協議を受けた。該当地は周知の埋蔵文化財包蔵地（五反田遺跡と番城遺跡の２者にまたがる）に属する。このため、事前に試掘調査を実施し、遺跡までの深さや内容を確認する必要が生じた。平成18年11月16日に事業課である前橋市管財課から試掘調査依頼書が前橋市教育委員会に提出された。これを受けて教育委員会では平成18年11月28･29日にかけて試掘調査を行った。調査の結果、縄文時代の遺構と中世の溝を検出したため協議を行った。現状での保存が不可能との事から、記録保存を目的とした発掘調査について調整に入った。平成19年７月27日に前橋市長より発掘調査依頼書が教育委員会に提出された。教育委員会では内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団に調査依頼を行った結果、調査団直営では、実施困難であるとの回答を受けた。その結果、調査団は本調査を民間調査機関に依頼することとなり、依頼者である前橋市とも合意した。平成19年７月31日に調査団と前橋市の間で発掘調査に関する委託契約を締結した。調査団は民間調査機関であるスナガ環境測設株式会社と８月８日に業務委託契約を締結し、８月10日より土木機械による表土掘削を開始した。

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

１　遺跡の立地

遺跡の所在する鳥取町字番城は、前橋市の中心市街地から北東へ約５㎞の位置にあり、昭和29年前橋市に合併するまで芳賀村役場の庁舎が在った。芳賀村は現在の勝沢、小神明、五代、鳥取、小坂子、嶺の７町に渡る行政の中心地でもあった。本遺跡の北に芳賀北部団地、南に芳賀西部工業団地と赤城南面の田・畑約2,340ha を灌漑する大正用水が西から東流している。南東には芳賀東部工業団地や五代南部工業団地が造成されている。前橋市では、福祉、教育、文化、環境等の整備拡充を進め、その施策の一つとして、前橋工業団地造成組合による工業団地や住宅団地の造成があり、昭和35年以来多くの団地造成を行っている。その中で、芳賀北部団地の南に隣接する本遺跡は、日本百名山の一つ赤城山南麓火山斜面の緩やかで自然豊かな土地である。山麓に源を発する中小の河川が付近を南流し、部分的に開析谷を形成し舌状台地と谷地部を作っている。谷と谷の間の丘陵性の台地には、住宅団地や畑地が広がり、谷地部は水田が営まれている。この斜面の末端部は、本遺跡から２㎞南へ下がった主要地方道前橋赤堀線付近に当り、旧利根川の作った広瀬川低地帯に接し、この付近から関東平野が南に広がっている。

２　歴史的環境

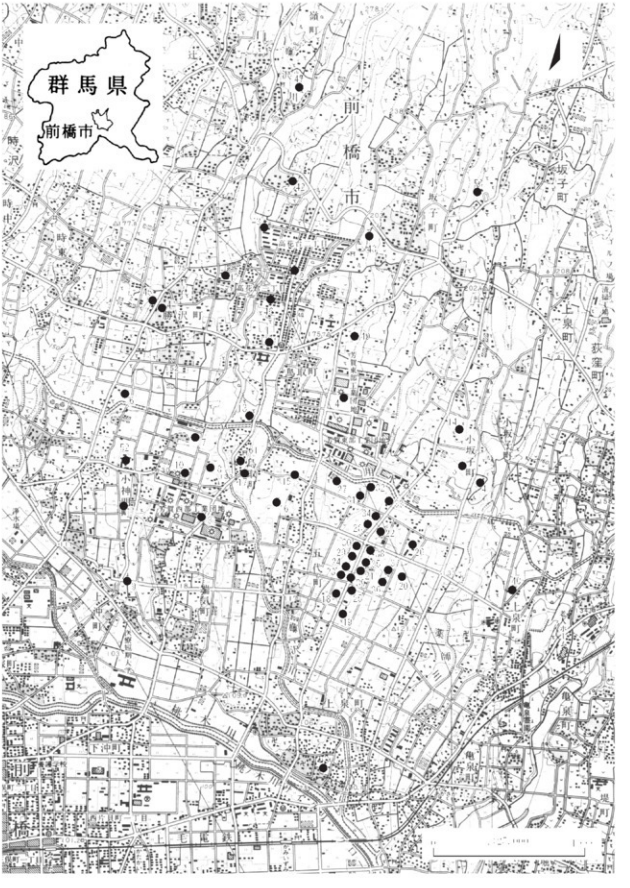
本遺跡の近隣地域では、芳賀工業団地、住宅団地造成事業に伴う遺跡調査が昭和40年代後半から昭和50年代前半にかけて行われ、芳賀団地遺跡群（芳賀北部団地遺跡、芳賀西部団地遺跡、芳賀東部団地遺跡）として多くの遺構・遺物が報告されている。芳賀北部団地遺跡では縄文時代前期から後期の竪穴住居跡や中期の敷石住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡や中世の勝沢城跡の一部を検出した。芳賀西部団地遺跡では、縄文時代前期の竪穴住居跡や配石遺構を検出した。また、昭和10年の上毛古墳総覧の記載漏れ古墳を32基検出し、芳賀地区には集中して100基近くの古墳が確認された。芳賀東部団地遺跡では、縄文時代前期の竪穴住居跡や中期末から後期前半の敷石住居が検出されている。その他報告されている遺跡から芳賀北曲輪遺跡では、縄文時代前期の住居跡や中期末から後期前半の敷石住居、倉本遺跡は弥生時代の竪穴住居跡や戦国時代以降

の環壕、端気遺跡群Ⅰでは弥生時代の方形周溝墓など、端気遺跡群Ⅱでは中世の環壕が検出されている。小神明遺跡群Ⅱ、西田遺跡からは古墳時代後期の円墳や帆立貝式古墳の検出があった。檜峯遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居跡とともに奈良三彩小壺（前橋指定重要文化財）が検出された。鳥取福蔵寺遺跡では縄文時代の竪穴住居跡、古墳から奈良・平安時代の竪穴住居跡や製鉄遺構が、鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡では縄文時代の竪穴住居跡、古墳から奈良・平安時代の竪穴住居跡や細石刃文化石器群（旧石器）が検出されている。本遺跡を含めた五代南部工業団地遺跡群では平成12年度から16年度と18年度に渡り発掘調査し、縄文時代前期・中期の竪穴住居跡や土坑、古墳時代前期から後期の竪穴住居跡・方形周溝墓・周溝状遺構・土坑、奈良・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・ピット・溝跡・井戸跡等が検出され、中・近世では、地下式土坑・土坑・溝跡・井戸跡等が検出されている。

このように芳賀地区の遺跡を見ると、旧石器時代から縄文、古墳、奈良・平安、中・近世の遺構が検出され、ほとんどの時代にわたり人々の生活の痕跡が見られる地域である。

第１表　周辺遺跡概要一覧表

№	遺　跡　名	概　　要
1	鳥取番城遺跡	本遺跡
2	芳賀北部団地遺跡	縄文、奈良・平安住居跡、勝沢城跡
3	芳賀西部団地遺跡	縄文住居跡、古墳
4	芳賀東部団地遺跡	縄文住居跡、古墳、 古墳～奈良・平安住居跡
5	檜峯遺跡	古墳～奈良・平安住居跡
6	小神明遺跡群Ⅰ	縄文住居跡、奈良・平安住居跡
7	小神明遺跡群Ⅱ 九料遺跡	縄文住居跡（敷石）、古墳住居跡、 奈良・平安住居跡、近世埋葬施設
8	小神明遺跡群Ⅱ 西田遺跡	縄文住居跡、古墳住居跡、円墳、 帆立貝式古墳
9	端気遺跡群Ⅰ・Ⅱ	縄文住居跡、弥生、方形周溝墓、 古墳住居跡、環壕（中世）
10	倉本遺跡	弥生住居跡、環壕（戦国時代以降）
11	小神明遺跡群Ⅱ 大明神遺跡	古墳住居跡
12	芳賀北曲輪遺跡	縄文住居跡、古墳
13	芳賀北原遺跡	古墳住居跡、奈良・平安住居跡
14	五代檜峯遺跡	古墳住居跡
15	鳥取東原遺跡	古墳住居跡、近世埋葬施設
16	鳥取福蔵寺遺跡	縄文住居跡、 古墳～奈良・平安住居跡
17	鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡	旧石器（細石刃文化石器群）、縄文 住居跡、古墳～奈良・平安住居跡
18	五代江戸屋敷遺跡	古墳～奈良・平安住居跡、他
19	五代木福Ⅰ遺跡	縄文・古墳住居跡、奈良・平安住居跡
20	五代木福Ⅱ遺跡	縄文配石遺構、 古墳～奈良・平安住居跡
21	五代竹花遺跡	縄文住居跡、 古墳～奈良・平安住居跡
22	五代深堀Ⅰ遺跡	縄文住居跡、平安住居跡
23	五代伊勢宮Ⅰ遺跡	古墳住居跡、奈良・平安住居跡、他
24	五代伊勢宮Ⅱ遺跡	縄文住居跡、古墳住居跡、奈良住居跡
25	五代伊勢宮Ⅲ遺跡	縄文土坑、平安住居跡、他
26	五代深堀Ⅱ遺跡	縄文住居跡、古墳～奈良・平安住居跡
27	五代中原Ⅰ遺跡	縄文住居跡、古墳・平安住居跡
28	五代伊勢宮Ⅳ遺跡	縄文住居跡・土坑、平安住居跡
29	五代伊勢宮Ⅴ遺跡	縄文住居跡・土坑、 古墳～奈良・平安住居跡
30	五代伊勢宮Ⅵ遺跡	縄文住居跡・土坑、古墳～奈良・平 安住居跡
31	五代中原Ⅱ遺跡	縄文住居跡、古墳住居跡、他
32	五代中原Ⅲ遺跡	古墳住居跡、土坑、柱穴、
33	五代山街道Ⅰ遺跡	縄文住居跡、古墳住居跡、平安住居跡
34	五代山街道Ⅱ遺跡	縄文土坑、他
35	五代竹花Ⅱ遺跡	縄文住居跡、古墳～奈良・平安住居跡
36	五代木福Ⅲ遺跡	古墳～奈良・平安住居跡
37	五代木福Ⅳ遺跡	古墳～奈良・平安住居跡
38	五代深堀Ⅲ遺跡	縄文住居跡・土坑、 古墳～奈良・平安住居跡
39	五代伊勢宮遺跡(1)	縄文住居跡・土坑、 古墳～奈良・平安住居跡
40	新田塚古墳	円墳
41	檜峯古墳	円墳
42	桂正田稲塚古墳	円墳か
43	東公田古墳	墳墓
44	オブ塚古墳	前方後円墳
45	オブ塚西古墳	墳丘無
46	勝沢城跡	中世
47	嶺城跡	中世
48	小坂子城跡	中世
49	兎替戸の砦跡	中世
50	小坂子要害城跡	中世
51	鳥取の砦跡	中世
52	小神明の砦跡	中世
53	上泉城跡	中世



第２図　周辺遺跡図

Ⅲ　調査の方針と経過

1　調査方針

調査実施に際しては、グリッドを西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３、…、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３、…を基本として（グリッド原点Ｘ０、Ｙ０は、日本測地系　座標値Ｘ＝46,924.000、Ｙ＝－64,960.000）調査区域に４ｍ毎にグリッドを設定した。グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。また、水準は南側の道路を隔てた芳賀小学校の屋上にある２級基準点(４)からの基準標高に基づき測設した。

図面作成は、平面図をトランシット、断面図を遣り方による細部測量で作図を行った。また、遺構等の写真撮影は35㎜モノクロ・リバーサル、デジタルカメラの３種類を使用した。

2　調査経過

調査は、前橋市教育委員会の内部組織である調査団の指導、監督のもと、スナガ環境測設株式会社が実施した。平成19年８月８日より現地調査テント設営、機械及び資材を搬入した。８月10日、調査範囲の確認を調査団業務監督員と調査区域の範囲や注意事項の確認を行い、重機により調査団業務監督員の指導を得て表土層掘削を行うとともにジョレン掛精査により遺構確認を行った。８月17日から溝跡、土坑の覆土除去作業を開始し、グリッド杭、水準点測設を行い遺構図面作製作業を進め９月４日に終了し、９月10日調査団の検査を受け、９月11日に調査が終了し、９月13日埋め戻し作業を完了した。

Ⅳ　層　　序

本遺跡の基本土層は、Ｗ－１号溝の中央付近の西壁部分をもとに模式的に断面図を作成し、それについての土層説明を下記に掲載した。また、地点により堆積状態の差異はあるが基本的に第３図に示したとおりである。

第３図　基本土層断面図

Ⅰ．盛土（砕石）
Ⅱ．明黄褐色土層 中締粘 As-YPを含む
Ⅲ．明黄褐色土層 中締粘 As-SPを含む
Ⅳ．明黄褐色土層 弱締中粘 As-BPを含む
Ⅴ．明黄褐色粘質土層 強締粘 As-BPを含む
Ⅵ．黄褐色粘質土層 強締粘 ATを含む
Ⅶ．鈍い黄褐色粘質土層 強締粘（暗色帯）
Ⅷ．黄褐色粘質土層 強締粘 灰白色軽石粒を含む

＊As-YP：浅間板鼻 黄色軽石（1.3～1.4万年前）
＊As-SP：浅間　　白糸軽石（1.5万年前）
＊As-BP：浅間板鼻 褐色軽石（1.6～2.1万年前）
＊AT　　：姶良Tn火山灰　　（2.1～2.2万年前）

Ⅴ　検出された遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

⑴　土　　坑〔第５・６図、図版１〕

縄文時代の土坑を６基検出した。形状は、袋状を呈する土坑が１基（Ｄ－１）で、Ｗ－１号溝により上端を壊されている。Ｄ－２～Ｄ－６は建物建築工事の際に撹乱を受け形状や規模を推定不可能なものも検出した。また、Ｄ－３～Ｄ－６は重複して検出し、土器を伴う土坑は多く検出したが、完形や完形に近い土器を出土した土坑はなく、時期は縄文時代前期であった。なお、各縄文土坑の計測値は第２表にまとめた。

第２表　土坑（縄文時代）計測表

（　）推定値、［　］現存値

土坑番号	遺構位置（グリッド）	形状		規模(cm)			遺物			備考（重複、その他）
		平面	断面	長径	短径	深さ	土器	土器片	石器	
Ｄ－１	Ｘ１・２，Ｙ４・５	円形	袋状	(115)	(115)	[55]	3	21	1	Ｗ－１重複
Ｄ－２	Ｘ３，Ｙ４	円形	(皿状)	(90)	(90)	[14]	1	15	—	撹乱
Ｄ－３	Ｘ３，Ｙ３・４	円形	(皿状)	[114]	[112]	[32]	1	14	—	Ｄ－４，５重複・撹乱
Ｄ－４	Ｘ３，Ｙ３	不整形	不明	[70]	[52]	[26]	—	3	—	Ｄ－３，５重複
Ｄ－５	Ｘ３・４，Ｙ３・４	円形	不明	[184]	(183)	[8]	1	1	—	Ｄ－３，４，６重複・撹乱
Ｄ－６	Ｘ４，Ｙ４	円形	不明	(105)	(105)	[6]	—	—	—	Ｄ－５重複・撹乱

2　中世以降の遺構と遺物

⑴　溝　　跡

Ｗ－１号溝〔第７図、図版１〕

Ｘ０～５，Ｙ０～５グリッドに位置する。規模は検出長30.75m、上端幅255～320cm、下段幅25～67cm、下端幅11～24cm、深さ156～252cmで薬研状の掘り込みで北東から南西へやや湾曲し走行する。溝底の標高は158.04～159.69mで、勾配は7.5%であった。断面から道路遺構で見られるような硬化面はなく、いっきに埋め戻されており溝の底に所々砂礫が堆積していた。また、溝に沿って柵跡など検出されなかった。時期は中世以降である。遺物は縄文土器の小片、土師器の小片、土製錘、板碑と思われる緑泥片岩の破片など数点出土した。

Ｗ－２号溝〔第７図、図版１〕

Ｘ3, Ｙ３～５グリッドに位置する。規模は検出長7.31m、上幅0.70～1.00m、下幅22～48cm、深さ８～14

cmで皿状の掘り込みで北から南へほぼ直線的に走行する。溝底の標高は160.72～160.86mで、勾配は1.9%を測る。硬く締まった土層は検出せずいっきに埋まった様子が見られ、道路として使用した形跡はなく、砂礫の堆積もない。時期は不明である。遺物は出土しなかった。

⑵ 土　坑

縄文時代以外の土坑は、調査区全体で１基検出した。時期は特定できなかった。なお、土坑の計測値は第３表土坑計測表にまとめた。

第３表　土坑計測表

土坑番号	遺構位置（グリッド）	形状		規模(cm)			遺物			備考（重複、その他）
		平面	断面	長径	短径	深さ	土器	土器片	石器	
D－７	X２,Y４	円形	皿状	[220]	[75]	25	—	—	—	W－１重複

［　］は現存値を示す

３　ま　と　め

本遺跡の北側に隣接する芳賀北部団地遺跡や南東側の芳賀東部団地遺跡では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代から中・近世にわたる遺構が検出され、遺物も出土している。本遺跡では、縄文時代前期の土坑と中世の溝跡が検出された。

調査地は、旧芳賀村役場（大正７年建設）に始まり前橋市と合併した後、芳賀公民館（昭和33年）として平成２年まで使用し、数次に渡る増改築により遺構上層部を削り取られている。また、住宅団地建設による道路拡幅工事などにより遺構を壊されており、芳賀北部・東部団地遺跡で検出された各時代の住居跡など存在した可能性がある。

⑴ 縄文時代

本遺跡では、縄文時代の土坑６基を検出した。

D－１号土坑はW－１号溝の縁に検出され、前述のように撹乱されており上端の規模は不明であるが、形状は上端から底に行くにしたがい膨らんだ形の袋状の土坑と思われる。遺物は、上層から欠損した丸い扁平形をした敲石が１点と平らに加工されているが割れて欠損している石１点が大型の自然石１点と共に出土し、その下から土器が出土した。潰された土器は完形にならなかったが深鉢を２点確認できた。縄文時代前期前半の黒浜式と思われる。また、出土した遺物の中には流れ込んだものと思われる関山式土器の小片を数点出土している。D－２号土坑も上端が削り取られ、公民館改築工事の建物基礎によりほぼ半分が撹乱されており規模および形状を確定できなかったが、深鉢を１点出土した。完形にならなかったが縄文時代前期前半の黒浜式と思われる。D－３～６号土坑は重複して検出した。公民館改築による撹乱で検出状況は悪かったが、土層断面から新旧関係を確認できた。古いものからD－４→D－３→D－５で、D－６→D－５と思われる。遺物は、D－３号土坑から縄文土器の小片を数点出土し、D－５号土坑から縄文土器の小片を数点と深鉢１点が出土した。いずれも黒浜式土器と思われる。近隣遺跡の住居跡の傾向から、本遺跡の北側にある芳賀北部団地遺跡では、縄文時代前期の住居跡は稀薄で中期の住居跡が多く検出されている。南東側にあ

る芳賀東部団地遺跡と南側の芳賀西部団地遺跡では、縄文時代前期の住居跡が多く検出されている。本遺跡は縄文時代の前期の集落域と中期の集落域の境界と推測される。

⑵　中世以降

芳賀地区には多くの城跡や砦跡がある。前橋市史によると、勝沢町字番城に勝沢城跡があり、字名のようにこの城は、嶺城の番城、すなわち、支城であったと思われる。本遺跡から北へ1700mに嶺城跡、250m北側に勝沢城の本丸跡が存在したとされている。芳賀村誌には、番城は勝沢町にあり、建久元年（西暦1190年）鎌倉幕府の臣、藤沢次郎清近（清親）の居城。「清近は、射術に秀で、源頼朝の隔心ない者として抜擢されて戦功があった。」とあり、遺構は室町時代以後の城とある。勝沢城は、鎌倉時代に始まり廃城の時期は確認されてはいないが、室町時代以降の戦乱の世の中を通り抜けてきたと思われる。

本遺跡で検出されたW－１号溝は、薬研状で北東から南西に走行し、北西側へ湾曲し掘られている。上幅が３ｍほどで、深さ1.6mから2.5mを測る。溝の縁辺部に柵を巡らせた跡は確認できなかった。また、覆土は徐々に埋まったのではなく、いっきに埋め戻された様相であった。遺物は縄文時代から中世の遺物を出土しているが出土量が少ない。中世の遺物としては、軟質陶器の内耳鍋が出土した。そのほか、板碑と思われる緑泥片岩の破片も出土している。出土した遺物から15世紀頃のものと思われ、勝沢城に関連する堀と考えられる。しかし、本遺構は、本丸から250mほどの距離があり、城の堀とするなら嶺城の規模に匹敵する大きな城となる。また、掘られている方向や湾曲している状況など、地形や防御策によりこのような堀が他の城跡にないことはないが、勝沢城が嶺城の支城であったことや堀の走行状況から考え、城を取り巻き防御する壕であったのか疑問である。今回調査した溝の先がどのような様相を呈するかを発掘することは不可能であるが、近隣の調査により解明されることを願う。

第４表　遺物観察表（縄文時代）

法量は①口径②底径③胴部最大④器高を表し、単位はcmである。また、（ ）は推定値、［ ］は現存値を表す。

遺物番号	台帳番号	器 種	法　量	①胎土 ②焼成 ③色調 ④遺存	器形の特徴、文様構成、文様施文	備　考
D－1－1	№４	深鉢	① 14.8 ④[12.8]	①繊維②良好 ③明褐色④1/2	全面RL・LRの羽状縄文。平口縁。穿孔。	底部を欠く 黒浜
D－1－2	№４	深鉢	①(35.4) ④[36.2]	①繊維②良好 ③明褐色④口～胴	全面RL・LRの羽状縄文。頸部ですぼまり口縁にかけて外反。平口縁。	黒浜
D－1－3	一括	鉢	④[3.2]	①繊維②良好 ③黄褐色④胴	半裁竹管による平行沈線。円形竹管による刺突。	関山か
D－2－1	№１	深鉢	①(38.2) ④[36.1]	①繊維②良好 ③黄褐色④口～胴	全面RL・LRの羽状縄文。緩い波状口縁。胴部に僅かなくびれ。	黒浜
D－3－1	№２	鉢	④[7.5]	①繊維②良好 ③明褐色④口～胴	LRの斜縄文。平口縁。	黒浜
D－5－1	№１	深鉢	① 15.0 ④[13.0]	①繊維②良好 ③明黄褐色④1/2	RLの斜縄文。平口縁。頸部から口縁にかけて内湾する。	底部を欠く 黒浜

第５表　石器観察表

遺物番号	台帳番号	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石　材	備　考
D－1－4	№２	敲石	13.3	[9.3]	5.4	720	安山岩	先端部敲き痕あり。 胴部磨り跡。欠損あり。

第６表　遺物観察表（中世以降）

法量は①口径②底径③胴部最大④器高を表し、単位はcmである。また、（ ）は推定値、［ ］は現存値を表す。

遺物番号	台帳番号	器 種	法　量	①胎土 ②焼成 ③色調 ④遺存	器形の特徴、文様構成、文様施文	備　考
W－1－1	一括	軟質陶器内耳鍋	①(38.4)②(27.4) ④(29.0)	①細粒②良好 ③明褐色④1/6	器壁は薄く、器表は黒灰色。外面に煤付着。口縁端部は平坦。口縁部下くびれ。体部外面篦削り。	15世紀

注）遺物観察表の記載は以下の基準で行った。

1．胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とした。

2．焼成は、極良、良好、不良の３段階とした。

3．色調は、土器外面で観察し、色名は「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄1999）による。

参考文献

小神明遺跡群　1982　前橋市教育委員会

小神明遺跡群Ⅱ　1984　前橋市教育委員会

小神明遺跡群Ⅳ　1986　前橋市教育委員会

端気遺跡群Ⅰ　1982　前橋市教育委員会

端気遺跡群Ⅱ　1983　前橋市教育委員会

芳賀団地遺跡群第１巻　1984　前橋市教育委員会

芳賀団地遺跡群第２巻　1988　前橋市教育委員会

芳賀団地遺跡群第３巻　1990　前橋市教育委員会

芳賀団地遺跡群第５巻　1994　前橋市教育委員会

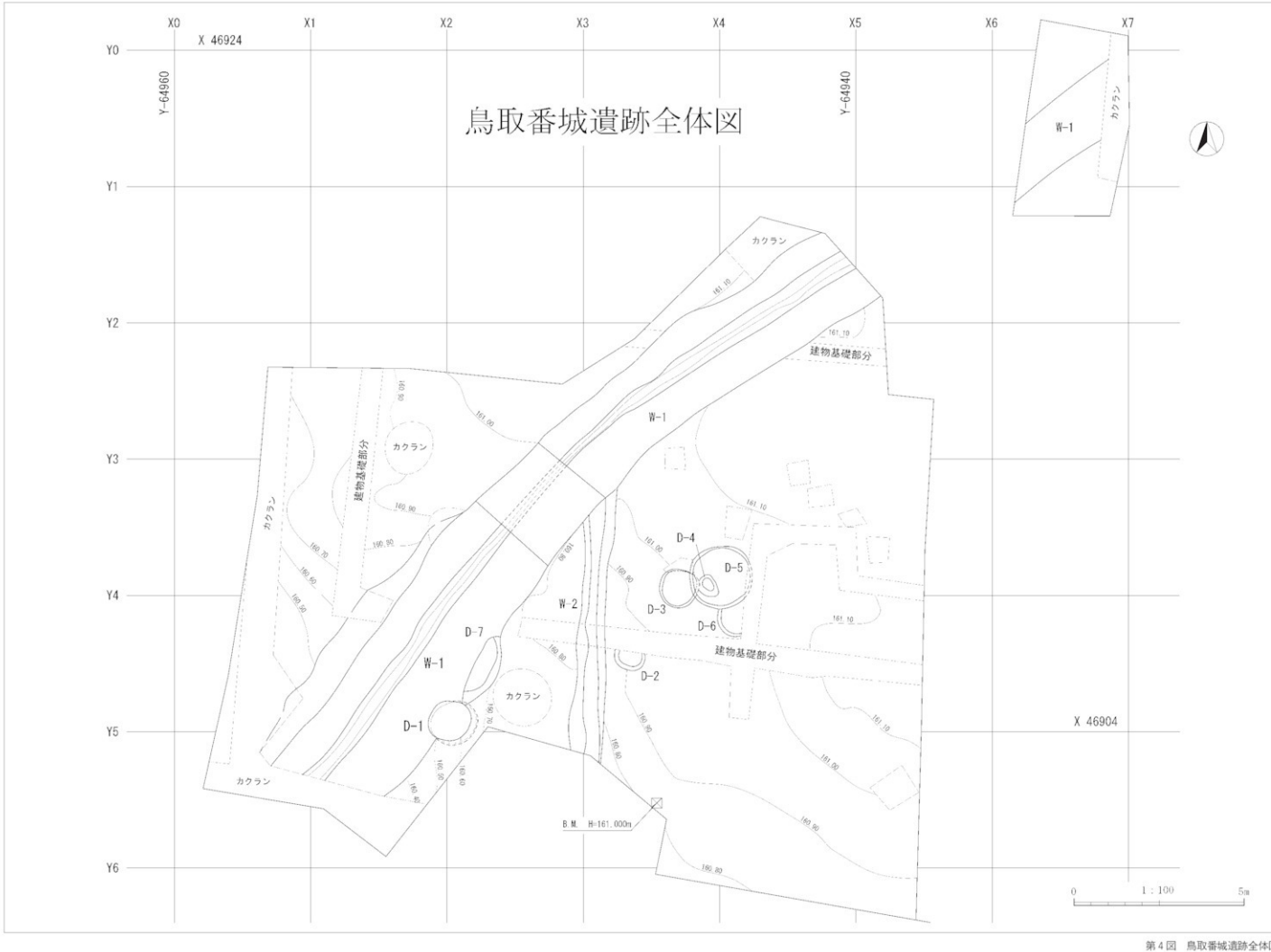
芳賀北原遺跡　1992　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

五代深堀Ⅲ遺跡　2004　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

図説・前橋の歴史　1986　近藤義雄

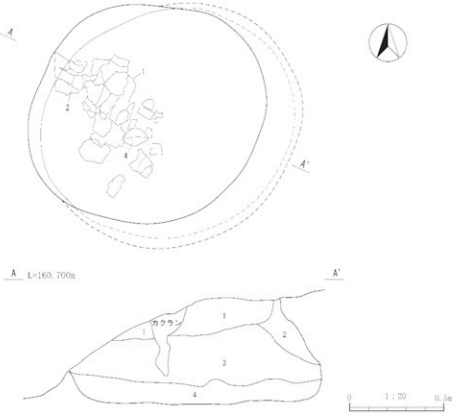
芳賀村誌・芳賀の町誌　1993　芳賀村誌改訂並びに町誌編纂委員会
芳賀地区自治会連合会

城館調査ハンドブック　1996　千田嘉博・小島道裕・前川　要



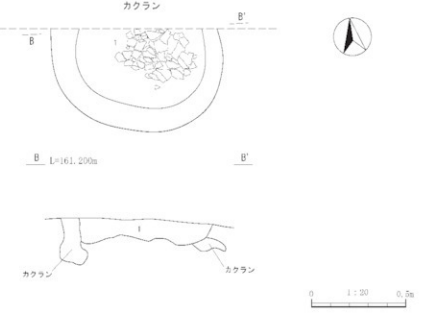
第４図　鳥取番城遺跡全体図

D-1



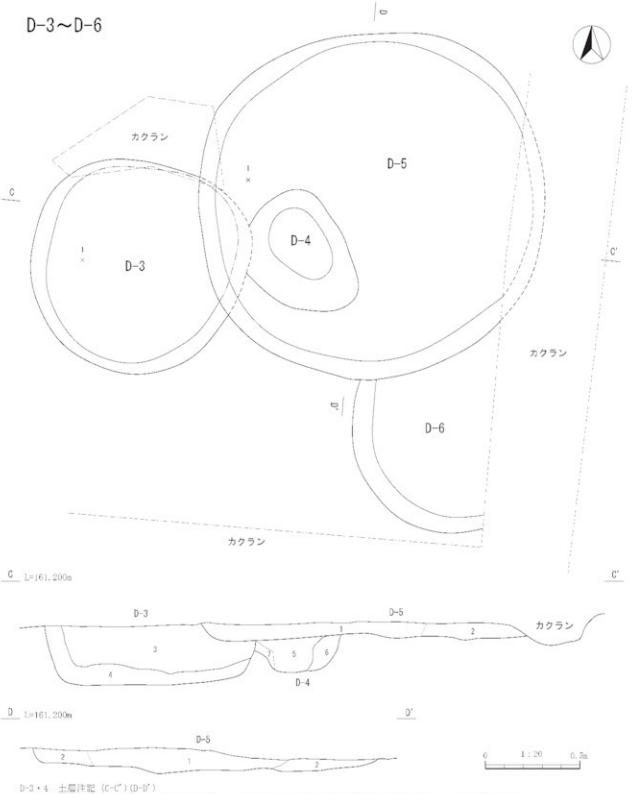
D-1　土層注記（A-A'）
1.暗褐色土(10YR3/3)　中締弱粘　白色砠石粒φ1～3mmを3%、にぶい黄褐色(10YR4/3)を斑降り状に30%、炭化物粒を1%含む。
2.にぶい黄褐色土(10YR4/3)　中締弱粘　白色砠石粒φ1～3mmを3%、褐色(10YR4/4)を斑降り状に20%含む。
3.黒褐色土(10YR2/3)　中締弱粘　白色砠石粒φ1～3mmを5%、暗褐色(10YR3/3)を斑降り状に20%、炭化物粒を1%含む。
4.3に、ローム粒ブロックを15%含む。

D-2



D-2　土層注記（B-B'）
1.暗褐色土(10YR3/4)　中締弱粘　白色砠石粒φ1～5mmを5%、にぶい黄褐色(10YR4/3)を15%、炭化物を少量含む。

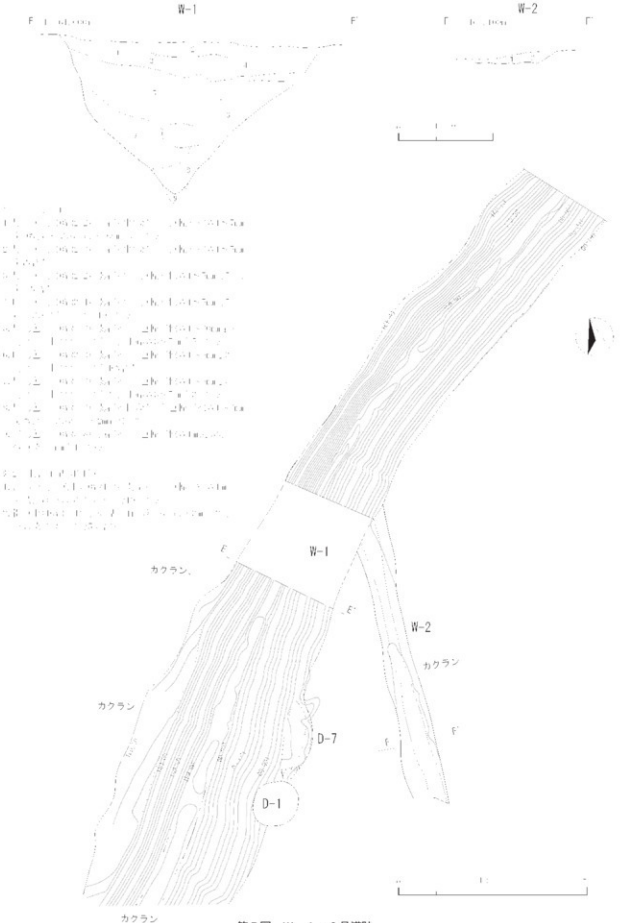
第５図　Ｄ－１・２号土坑



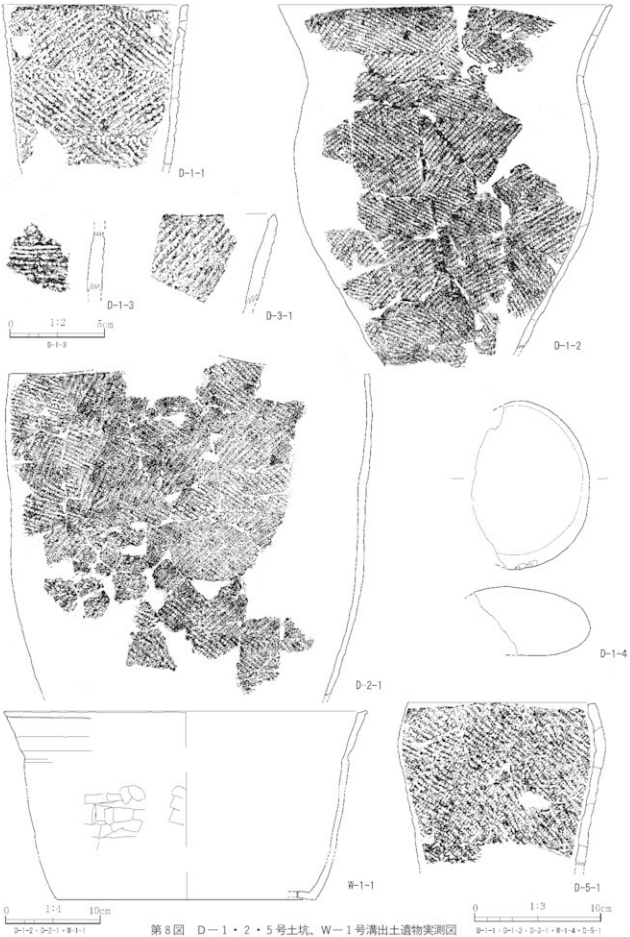
D-3・4　土層注記（C-C'）（D-D'）

1. 暗褐色土(10YR3/4) 中締弱粘　白色軽石粒φ1～5mmを10%、にぶい黄褐色(10YR4/3)を霜降り状に30%、炭化物1%を含む。
2. 褐色土(10YR4/4) 中締弱粘　白色軽石粒φ1～3mmを2%、ローム粒ブロックを5%含む。
3. 暗褐色土(10YR3/4) 中締弱粘　白色軽石粒φ1～5mmを7%、にぶい黄褐色(10YR4/3)を霜降り状に25%、炭化物粒を1%、橙色粒を微量含む。
4. 暗褐色土(10YR3/4) 中締弱粘　白色軽石粒φ1～5mmを7%、にぶい黄褐色(10YR4/3)を霜降り状に20%、ロームブロックを3%含む。
5. 暗褐色土(10YR3/4) 中締弱粘　白色軽石粒φ1～3mmを5%、にぶい黄褐色(10YR4/3)を霜降り状に15%、炭化物粒と橙色粒を微量含む。
6. 純い黄褐色土 (10YR4/3) 中締弱粘　白色軽石粒φ1～3mmを3%含む。
7. 4に、ローム粒ブロックを多く含む。

第6図　D－3～6号土坑



第７図　W―１・２号溝跡



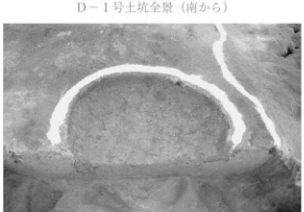
第8図　D－1・2・5号土坑、W－1号溝出土遺物実測図

鳥取番城遺跡全景（北から）

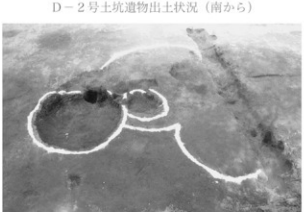
Ｄ－１号土坑遺物出土状況（北から）

Ｄ－１号土坑全景（南から）

Ｄ－２号土坑遺物出土状況（南から）



Ｄ－２号土坑全景（北から）



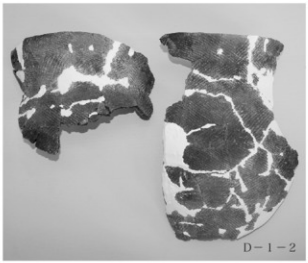
Ｄ－３～６号土坑全景（南から）

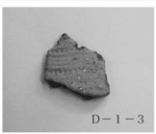
Ｗ－１号溝全景（南から）

Ｗ－２号溝全景（南から）

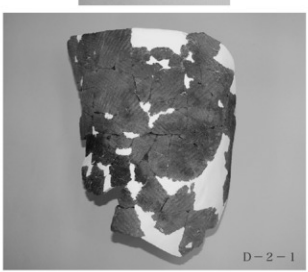
図版 2

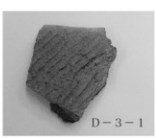
D－1－1

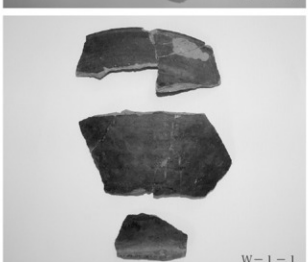

D－1－2


D－1－3

D－1－4


D－2－1


D－3－1


W－1－1

D－5－1

抄　　録

フリガナ	トットリ バンジョウ イセキ
書名	鳥取番城遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	梅澤克典　(前橋市埋蔵文化財発掘調査団) 権田友寿・山口和宏（スナガ環境測設株式会社）
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371－0018　群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2007年11月２日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
鳥取番城遺跡 (トットリ バンジョウ イセキ)	前橋市 (マエバシ シ) 鳥取町 (トットリ マチ) 410番1	10201	19C39	36°25′14″	139°06′32″	20070808 ～ 20071102	320㎡	市有地売却

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
鳥取番城遺跡		縄文時代	土坑	6基	縄文土器・石器	
		中世	溝跡	1条	縄文、土師・須恵器 軟質陶器	
		不明	土坑	1基	縄文、土師・須恵器	
			溝跡	1条	なし	

鳥取番城遺跡

2007年10月25日　印刷
2007年11月２日　発行

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市三俣町二丁目10-2
TEL　027-231-9531
編集　スナガ環境測設株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社